

1 (表紙)

元文五年四月

御公儀江御訴詔之御請并竹嶋渡海之次第先規より書写シ覚記

伯耆国米子町人

村川市兵衛

大谷政太郎

2 (白紙)

(注 3ページは横線で見消)

一 大廣院様御代元文五年四月八日從御国屋敷河村彦十郎様を以

御公儀江被為遊御達候ニ付乍恐祖父之者儀御公儀江御訴詔之儀共被為達御沙汰候趣委者其節祖父大谷九右衛門事參府仕候条
自分日記写シ并私共先祖之者江竹嶋渡海之儀被為仰付候次第先規より書付之写シ
左之通御座候、尤右御達之節願書之写シ如左

伯耆国米子町人

村川市兵衛

大谷政太郎

3 (乍恐奉願口上之覺)

一 竹嶋渡海之儀私共先祖之者江被為仰付候旨趣者松平新太郎様因幡伯耆御領知之節元和三年御両国御仕置之為御上使阿部四郎五郎様被為遊
御越候砌竹嶋渡海仕度旨私共先祖之者御訴詔申上、翌元和四年則先祖之者共
当御地江相詰御願奉申上候處御吟味之上願之通渡海可仕旨、同年五月十六日
新太郎様江以御奉書被為仰付、則右之御奉書新太郎様より先祖之
者共頂戴仕就夫御目見被為仰付冥加至極難有仕合奉存候、其後每歲渡海仕候處、元錄(ママ)五年彼嶋江唐人相渡依之伯耆守様より御注進被仰上候處、竹嶋渡海制禁之旨元錄(ママ)九年正月廿八日
唐人相增候様子ニ付追々伯耆守様より御注進被仰上候處、竹嶋渡海制禁之旨元錄(ママ)九年正月廿八日

5

伯耆守様迄以御奉書被為仰出候旨則從
伯耆守様被仰渡候御事一 竹嶋渡海制禁被為仰付候ニ付、村川市兵衛元禄年中當御地江相詰御歎之
御訴詔申上候内病氣ニ付、其上國元江残シ置候妻子及渴命候之間御願半ニ

先国元ニ帰度旨御断申上罷帰候、其節大谷九右衛門儀幼少尤困窮仕候ニ付、右市兵衛与一所ニ当御地江相詰候儀難相成乍存其儀無御座候、其後享保九年竹嶋渡海之次第段々被為遊御尋候ニ付、委細御請書差上候砌大谷九右衛門何卒當御地江相詰御歎之御願申上度所存御座候得共困窮仕罷有候ニ付、乍残念其節茂及延引候御事

右之通元和四年より元錄^(マ)四年迄竹嶋渡海仕候處、彼嶋^江唐人相渡り候付

6

渡海制禁被為仰付候、以後両人之者渡世可仕様茂無御座候處
御領主より御憐愍を以先及渴命不申様ニ被仰付置候、是以

御上之御大恩之筋難有仕合奉存旨然者當時至極及困窮候ニ付乍恐御慈悲を以如何様共取続候様被為仰付被下置候者難有仕合奉存候、全奉對
御上江私式之者ケ様被御願奉申上儀千万恐入奉存上候得共

台徳院様御代元和四年より元禄七年迄七拾七年之間

御代々様江御目見被為仰付、其上先祖之者共御紋御時服頂戴仕、并道中
御紋之指札蒙御免竹嶋渡海之船^江御紋之船印頂戴仕、且道具蒙

御免元和四年より元錄^(マ)四年迄七十四年之間毎歳彼嶋^江渡海仕、尤渡海禁制

被仰付候已後今以

御領主より及渴命不申様御憐愍を以御取計之御事共是又右書顕候通重々

莫太成奉蒙御大恩候者之子孫末々ニ到至極之及困窮、此上難取続相成候
得者偏ニ御厚恩忘却仕候様ニ^マ可罷成哉^与誠以不顧恐今度大谷九右衛門

相詰右両人之者身命相続候様ニ御慈悲之筋乍恐奉願上候、何卒願之通
被為仰附被下置候者難有仕合可奉存候、以上

伯耆国米子町人

大谷九右衛門

元文五年申四月日

寺社御奉行所様

御役人中様

右之通御座候

8 (注 8ページは横線で見消)

一 祖父大谷九右衛門儀上野宮様^江御目見申上候處、其由緒を以万里ノ小路
民部卿様ヲ以御尋被遊候者、其方儀竹嶋渡海制禁ニ付渡世可致難儀何を
致家業候哉^与御尋被為遊候ニ付、隨^而御請申上候者從
台徳院様常憲院様迄御代々様^江参勤之独礼申上来り候者共

7

2

御座候得共則因伯之御大守御内伯州米子之御城主より御憐愍を以
米子被入込申候、魚鳥類之間屋店之座を私家業^ニ被為仰付被
下置候、此儀を以渡世仕家名取続難有仕合奉存候、并御大守様
御在国之節^者年始為御礼御目見申上候、右之趣乍恐御請書奉
差上候、以上

元文三年末十月六日

大谷九右衛門

米子町年寄

9 (注 9ページは横線で見消)

右之通御請書仕万里小路民部卿様^江差上申候之處追而
被仰候^者右之書附

宮様^江入御覽申候処御不便被為思召、此後

公方様^江願之筋有之候^ハ^者從

殿様宜敷御執成被遣候様内々御願并米子御城主より茂

御憐愍御加被遣候様御願可被為成遣之趣被仰出、則

御請^ニ致登山候様被為仰附候^ニ付御礼御請^ニ罷出申上候間

難有仕合奉存候

10 (注 10ページの8行迄横線で見消)

一 宮様^江御目見申上候由緒を以大廣院様御代從

宮様御宿坊を以蓮花寺五郎八様迄被仰候^者伯州米子大谷九右衛門儀
則米子之御城主より御憐愍を以魚鳥之間屋店之座を被仰附夫を

渡世仕罷在候、不相替被仰付置候^者

宮様御満足可被為思召之旨御頼^ニ而御座候、右^ニ付從

大廣院様

宮様^江

御請口上之趣

一 此度大谷九右衛門義

御頼被為遊趣承

知仕畏奉存候

一 九右衛門

御公儀^江御願申上候儀も

御座候、此已後右之儀

相願候^ハ^者役人共評儀も

仕可遣之由、此儀^者津田

周防より内々^ニ而護法院

まで之口上^ニ候

11

十二月廿六日

護法院

12

右之通御座候

一 右願書之面書顎候通私共先祖之者より尤親父共節迄
公方様江御目見被為仰附候節御紋之御時服拝領仕候条

大守様江御目見之節茂先祖之者共儀御紋衣拝領頂戴仕罷有候、且又私共
祖父之者共迄江府江相詰罷有候節者例月朔日為御礼

大守様江御目見被為仰付候ニ付、尤祖父大谷九右衛門儀

御公儀江御訴詔已後

大廣院様御代延享元年八月廿六日於鳥府乍恐御在國之節年頭御礼之儀

奉願候處達

上聞、則以御書付願之通被為仰付候之旨大和様於御館御役人衆中様被

13

仰渡候趣如左

御用之儀有之候間

唯今

御館江可被出候、以上

八月廿二日

ペ 大谷九右衛門殿

牛尾金右衛門
上村惣右衛門

追而申入候此紙面

昨晚可遣之處夜三入候

之故今日遣候、何分早

御屋敷江可罷出候、以上

14

八月廿三日

右之通御座候條、則御書附之写シ如左

其方儀御在國之節

年頭

御目見願之通被

仰附候

子八月廿二日

右之通御座候

一 右本文ニ書願候通私共先祖之者江竹嶋渡海之儀被為仰附候次第

先規より書附之写シニ而御座候、尚以委儀者此外相送候書附所持仕候

15

竹嶋渡海之次第先規より書附之写シ如左

一 貞享元年二月廿日

權現様以来之御勘状又者御由緒之御書有之者早速可相断之旨

御触而乍恐私共先規之者儀

權現様以来

御由緒之次第別而者

台徳院様御代元和四年五月十六日新太郎様江以御奉書竹嶋渡海之儀被為仰附候趣委細以書付相断之候儀御座候、尤右

御奉書之写シ如左

従伯耆国米子竹嶋江

16

先年舟相渡之由候

然者如其今度致渡

海之段米子町人

村川市兵衛大谷甚吉

申上付而達

上聞候之處不可有異儀之

旨被仰出候間被得

其意渡海之儀可被

仰付候、恐々謹言

永井信濃守 在判

五月十六日

井上主計頭 在判

土井大炊頭 在判

酒井雅楽頭 在判

松平新太郎殿

人々中

右之通御座候

一 台徳院様以来御目見被為仰附候節於御城竹嶋鮑一箱献上仕候、尤

献上之為御残御老中様方御側御用人民様方若御年寄様方

18

寺社御奉行様方江茂進上仕候付

台徳院様御代御側御用人松平右衛門太夫様より御書被成下候ケ様之類余夥所持仕候處祖父共節紛失申候、尤相殘候写シ如左

一筆申入候、其地江被參候

付くし鮑三百入壺箱

持参之由留主居之者

共方より日光へ申越候心付

之通祝着申候、尚追而

可申候間不具候、恐惶謹言

松平右衛門太夫

19

五月六日 正綱書印

追而申入候

御目見之儀ハ伊豆方江

申入候、以上

村川市兵衛殿参

右之通御座候

一 台徳院様以来御代々様御上意之趣從御老中様方被為

仰渡候ニ付、右之次第從安部四郎五郎様以御書被為仰越候ケ様之類

并御老中様方より被為預御挨拶候堅御捻其外御役人様方

御書を茂余夥所持仕候處、右書頭之通紛失仕候、尤相殘候写シ如左

20

好便之間一筆令申候

然者今度於京都進上

仕度旨被申候桐之木

串鮑去月土井大炊頭殿

御披露被成一段首尾

能上り申候竹嶋江渡海

様子を茂委

御尋無残所仕合候条

此旨可申遣由大炊頭殿

被仰渡候条如斯候、御

披露之刻則小濱民部方へ

申遣江戸江廻させ候

21

得者

上意付而小濱民部方江

申越其御請茂疾當

着候之間満足可有候

片便宜故令省略候

委細^者期後慶之時候

恐々謹言

安倍四郎五郎

正之書印

22 霜月十五日

村川市兵衛殿參

安倍四郎五郎様 酒井讚岐守忠勝

人々御中

昨日者伯耆国町人大屋九右衛門
私宅へ参候付御使之指添候、右之
九右衛門義竹嶋へ船を渡候、此頃
被帰候例公方様へ御目見仕候由
令得其意候、隨^而貴殿儀火々天之
節毎日御普請場へ御出之儀

23

御太儀存事^ニ候、何も期面上之
節候、恐惶謹言

八月十五日

為歲暮之御祝義

過朔日之御状殊

手拭五入一箱贈給

過分至候、御手前無

事御入候由目出珍重候

我等義も無恙有之

事候、將亦御紙面之

24

通四郎五郎可申聞併
来春竹嶋へ渡船六月

中者可有御參勤旨

万慶其節可申承候

恐々謹言

大久保宮内少輔

十二月十七日

村川市兵衛様

御返事

右之通御座候

25

一 台徳院様以來御代々様御目見之節御役人様方より御礼之次第書被為成御渡候ケ様之御書付_茂余夥所持仕候處、右書頭候通紛失仕候、尤相殘候写シ如左

五月廿八日

一 如例月 御礼相濟

參勤之御札

綿式百把金馬代 松平肥前守

綿百把金馬代 松平主殿頭

蠟燭二箱金馬代 松平筑後守

一 上松彈正大弼在着_二付候_而以使者蠟燭五箱二種一荷被差上之使者銀馬代

以自分御礼色部又四郎終_而御次之間伺公之面々并落緣_{二而}

伯耆国米子町人參上

大屋九右衛門

箱肴

右終_而入御

一大猷院様御代寛永十五年二月西之御丸御書院床之板御書棚之板

御用_ニ付竹嶋梅檀可差上旨被為仰附候處、首尾能上納之仕候、此外御代々様江御上納奉相勤候節從御役人様方右御請取書被成下候、ケ様之類余夥所持仕候處、右書頭候通紛失仕候、尤相殘候写シ如左

請取申御材木之事

一 武枚八 唐梅檀長壹丈四尺四寸幅武尺壹寸

あつさ武寸壹步

一 武本ハ 桐長六尺壹寸内壹本ハ中_{ニ而}五尺五寸廻り

壹本ハ中_{ニ而}五尺三寸廻り

合四本

27

右之進上木請取申者也、如件

正保弣年

長井清太夫印形

西ノ九月廿日 中根七左衛門印形

美濃部与藤次印形

伯耆国米子町

村川市兵衛殿

右之通御座候

一 廣有院様御代明暦三年六月於江府曾祖父村川市兵衛儀家督始而參府
28

仕候節被為遊御尋候付竹嶋渡海、尤例格并

御代々様江御目見之節御紋之御時服拝領被為仰附候次第、委細御請書仕

差上候条、右書付之写シ如左

乍恐口上之覺

一 私共竹嶋江渡海仕候儀者

台徳院様御代元和五年阿倍四郎五郎様就御執持松平新太郎様江以
御奉書竹嶋渡海之儀被為仰附、右御奉書私共頂戴仕罷有難有仕合

奉存候事

一 竹嶋渡海船江

御紋之船印且道具蒙御免今以左之通御坐候、先年右船朝鮮國江

29 漂着仕候節茂御紋之船印相立候故朝鮮表二而茂別而御馳走二而御座候由

且又私共儀道中御紋之指札蒙御免難有仕合奉存候事

一 御目見之儀寺社御奉行様江奉願候、尤私共當御地江罷下候儀八九年二而

一度參府仕候并御目見之度々御紋之御時服壹拝領仕難有仕合

奉存候事

右之通御座候、以上

明暦三年酉六月日

伯州米子町人

右之通御坐候

一 常憲院様御代寺社御奉行秋元摂津守様より御使を以御口書被成下候写シ如左
口上之覺

今度当御地江被相越候付

昨日者御入來殊竹嶋丸串
鮑一箱預持參怡悅之至候

為其如斯候、以上

30

秋元攝津守使

五月廿日

一 常憲院様御代元錄(ママ)七年三月祖父大屋九右衛門儀

御目見之年番ニ御座候處、尤幼少ニ罷有候ニ付同苗大谷藤兵衛儀為代當御地江相詰、則三月廿八日參上之為御礼

御目見被為仰附難有仕合奉存候、尤元錄(ママ)五年六月竹嶋江船相渡候得共

31

唐人罷有所務不仕帰帆仕候ニ付例格之通

獻上之鮑無御座候間改而干鯛一箱獻上仕、且御役人様方江茂箱肴差上申候其刻為御挨拶以御使者御口上書被成下數通右書顕之通紛失仕候、尤相殘候

写シ如左

口上之覺

昨日者干鯛一箱

預持參候、令祝着候

為其如斯候、以上

秋元但馬守使

32

三月廿九日

昨日者干鯛一箱

持參令祝着候

為其以使申候、以上

加藤佐渡守使

三月廿九日

右之通御座候

一 元和以來竹嶋江渡海之船節々朝鮮國江流着仕候條、尤午年大谷九右衛門仕出船數之内壹艘武拾壹人乘帰帆之節朝鮮江被吹流候處船者破損致候得共人數者船頭水主共無別條陸江上り候而、則朝鮮人出合介抱仕其許之於奉行所吟味有之、其上逗留中馳走日本江帰帆之節國王より船頭

33

水主_江餉別目録等之次第、其砌對州之役人中_江船頭水主委細書付出候
控之写シ如左

伯耆国漂流人口書之覚

一 伯耆国米子_{与申所}之村川市兵衛大谷甚吉仕出之拾三端帆之船式艘人数五十人乘
当年午二月三日本国出船、同十三日隱岐国_江着船四月彼所出帆、同八日竹嶋_江着船仕候事
一 船主村川市兵衛大谷甚吉儀

御朱印頂戴仕居每歲竹嶋_江船差渡相務候物_者ミちの魚の皮同油串蛇_{二而}
御座候、則御朱印之写所持仕罷有候事

一 国本よりハ右式艘之船_{二而}竹嶋_江渡於此所拾五端帆_ニ乘三艘_{三而}七月三日彼嶋帰帆
之節遭難風式艘之儀_者何国_江漂着仕候_{茂不存}候、拙者共乗船_者沖中_ニ二夜

3 4 漂罷有、同五日之夜四ツ時分朝鮮國之内ちやんきり灘と申所致漂着、於浦口
船破損仕、夜八ツ時分陸へ游ぐ上り居申候處朝鮮人出合我々手引申ちやんきりへ
列參宿壹軒_ニ式三人宛召置候_而粥を振廻申候、此所_ニ五日逗留仕候、家數廿軒
程相見へ申候其内地頭被罷越切麦酒肴等振廻被申候、其後ちやんきりの城下へ
被引越、五日逗留致シ候、其間両度酒肴振廻被申候事

一 七月十四日ちやんきりを罷立道中せそんと申所之地頭より酒肴振廻被申事
うるさんと申所三日逗留仕候、此外道中_ニ泊り申候得共所々之名覺不申候事
一 同廿一日とくねき_江参着仕候其日菓子酒肴振廻被申候、其外逗留中

3 5 三度酒肴振廻御座候、此所_ニ逗留七月廿一日より十月三日迄罷有候、同四日
とくねきよりさすとふと申所へ罷越候、此時_茂とくねき地頭より酒肴

菓子振廻被申候事

一 七月六日より十月四日迄ハ朝鮮國より扶持方塩嚧薪等迄賜之御馳走_{二而}御座候事
一 十月四日さすとふ江罷越候刻朝鮮_江被差置候役人中出合我等在所
并宗門手形所持之道具等之儀迄念比_ニ改有之其所より船_ニ乗役人中付キ
十月七日對州之内わにの浦と申所へ着船致、昨九日_ニ爰許_江罷着候事
人數式拾壹人宗門并歳付

3	一	一	一	一	一	一	同宗
7	法花宗	真宗	同宗	禅宗	真宗	同宗	同宗
单宗	旦那寺						
但那寺	同国	同国	同国	伯耆国	同国	同寺	同国
急支国	本教寺	万福寺	安國寺	法增寺	万福寺	同寺	同三十六
万根寺	同式十式	同三十九	同式十式	同式十九	同三十八	同三十式	同役
同式二九	同	水夫	桶大工	舟大工	舟大工	五郎作	同役
同	重兵衛	作兵衛	久右衛門	長兵衛	傳助	小作	
丰功							

一	一	一	一	一	一	一	一
同宗	淨土宗	同宗	同宗	禪宗	真宗	同宗	禪宗
旦那寺	旦那寺	旦那寺	旦那寺	旦那寺	旦那寺	旦那寺	旦那寺
同国	同国	同国	隱岐国	同国	伯耆国	同国	隱岐国
同寺	淨土寺	同寺	万泉寺	法增寺	万福寺	同寺	万泉寺
同三十	同四十	同廿九	同三十式	同四十四	同廿七	同五十四	同三十九
同	同	同	同	同	同	同	同
彦八	五助	九郎助	甚七	角助	治兵衛	治郎左衛門	佐助

右我々宗門寺請之儀東国出船之刻大谷甚吉手前ニ留置宗門寺請を別紙ニ相認船奉行江遣往来切手出シ申候を請取出帆致候然ル處、破損之刻右之往来切手

箱共ニ捨申候故所持不致候、尤船ニ積候荷物船道具之儀破損之節捨リ申候を
朝鮮人被入念取揚給候品々改御座候、以上

右之趣船頭治郎兵衛書付差出候覚書如件
十月十日

大谷九右衛門

寛文七年

二月廿九日

右之表未ノ二月廿九日書之写シ

右二書頤候通朝鮮國逗留中從國王船頭水主江貼別
之目錄式通、如左

漂倭處別贈	頭倭一人
	白米弐斗
	白紙貳卷
	従倭二十一名
	白米各壹斗
	白紙各壹卷
	丙午九月日
巡察使 (花押)	
	朱印
	堅紙
	薄様之厚キ
	樣成紙

40

漂倭二十二人

白米十肆石拾斗

大口魚壹百拾尾

新酒貳拾貳瓶

東菰貳拾貳塊

生鮮貳拾貳束

甘醬陸斗陸斗

右同断

際

丙午十月日

右同断

41

一 竹島江渡海仕候道法之内隱岐國嶋後福浦より七八里程渡り候而松嶋と申小嶋御座候
付、此嶋江渡海仕度旨

台德院様御代御願申上候處願之通被為仰附竹嶋同事ニ年々渡海仕候、尤毎度
奉差上候、竹嶋渡海之繪図ニ書願候御事

一 台德院様以来御巡見被為成御通候節、伯耆国米子御止宿之砌村川市兵衛
大谷九右衛門被召出竹嶋渡海之儀、尤

台德院様以来私共先祖より御目見被為仰付候次第被成御尋候ニ付委細言上
則書付差上申候御事

一 元錄^(マニ)五年壬申年如例年竹嶋江渡海仕候處、唐人罷在依之帰帆仕候、夫より六年

七年八年迄御差図を以渡海仕候處、年々唐人相増シ罷在候付所務不仕

42

帰帆之節其次第委細御届申上候、然者元錄^(マニ)九年丙子正月廿八日

伯耆守様江以御奉書右竹嶋渡海制禁之旨被為仰出候趣被為

仰渡其段奉畏候、尤右御奉書之写シ如左

先年松平新太郎

因州伯州領知之節

相伺之伯州米子之

町人村川市兵衛大谷

甚吉竹嶋江渡海

至尔今難致漁候

向後竹嶋江渡海之

43

儀制禁之可申付旨

被仰附候間可被存

其趣候、恐々謹言

土屋相模守

在判

正月二十八日

戸田山城守

在判

阿部豊後守

在判

大久保加賀守

在判

松平伯耆守殿

右之通御座候

44

一 竹嶋渡海制禁被為仰出候付、家業を失渡世難仕、依之

祖父村川市兵衛儀元禄十丑八月江戸江罷下り、同九月寺社

御奉行所井上大和守様迄乍恐御歎之願書差上、暫時江戸江相詰

罷有候處病氣付在所江罷帰候事

一 有徳院様御代享保九年四月竹嶋渡海之儀被為遊御尋其旨於鳥府

御書付を以被仰渡候趣如左

江戸御尋書之写シ

- 一 先年竹嶋江伯耆國より相渡候者唐人出合追払候、其節者唐人兩人召捕罷越候
其節之首尾并年号月日相調可差上事
- 右之嶋江有之候品々委細書付可差上事
- 竹嶋東西広サ大概之絵図仕可差上事
- 右嶋ミチ有之候哉、其外獸類有之由相聞候、此段委細書付可差上事
- 右嶋竹木者如何様成もの有之哉書付可差上事
- 唐人相渡り候時節と伯耆國より相渡候時節違候様相聞候、此段も可申上事
- 伯耆之浦より竹嶋迄渡海之数里者如何様有之候哉、竹嶋より朝鮮江者
- 如何程有之候哉、此段書付可差上事
- 右之通御尋付御請書差上候、所々写如左
- 右之通御尋付御請書差上候、所々写如左
- 46 第御一箇條之御請
- 一 元禄(マメ)五壬申年二月十一日米子より出船、隱岐國嶋後福浦江着岸、三月四日
- 福浦より出船、同廿六日朝五ツ時竹嶋之内いか嶋と申所江着船、様子見申候得共
鮑大分取上ヶ申様相見江不審ニ奉存候故、同廿七日朝濱田浦江参候内唐船
式艘相見江申候内老艘者すヘ船老艘者浮船ニ而居申候唐人ニ拾人計見ヘ申候
右之浮船乗り此方之船より八九間程沖を通り大坂浦と申所江廻り申候右之内
兩人陸ニ残り居申候處ニ、又小船ニ乗り参候故、此方之船ニ乗せ申候而、何国之者と
相尋候得者老人ハ通辞にて朝鮮國かわてんかわくの者と申候、此嶋者
- 日本之地三而從
- 御公方様御代々拝領仕毎歲渡海致シ候嶋ニ而御座候所ニ何とて其方共
- 47 参候哉与相尋候得者此嶋より北ニ当り嶋有之三年ニ老度宛國主より用ニ而鮑取參候
國元者二月廿一日拾老艘ニ而出船致シ、難風逢五艘ニ以上五拾三人乘此嶋ニ三月
廿三日ニ流着此嶋之様子見申候得者鮑有之候間致逗留鮑取上ヶ候由申候
左候ハ者此嶋を早々罷立候様申候得者船少損候間造作仕調次第出船可仕候間
其許之御船是ヘ御すヘ可被成と申候得共此方共船者すヘ不申先人計陸ニ上り
見分仕候處、兼而此方より拝置候諸道具并漁船八艘見江不申候付、通辞江段々
吟味仕候得者浦々江廻遣し候由申候先此方之船すヘ申様ニと申候得共
唐人者大勢此方者纔式拾老人ニ而御座候ニ付無心元奉存竹嶋より

三月廿七日七ツ時出船仕申候、然共何ニ而茂印無御座而ハ如何と奉存唐人与
拵置候串鮑少笠壺フ網頭巾壺フ味噌かうし壺玉取之出船いたし

四月朔日石州濱田浦江着船仕夫より四日雲州雲津浦迄参翌五日
七ツ時米子江帰帆仕候右之趣元禄五千申歳四月六日竹嶋渡海之船頭
水主共口上申候、右唐人弓鉄砲所持不仕哉与被為遊御尋候其節吟味
仕候處、惣而武具類所持不仕候

第御二箇條之御請

一 元錄(ママ) 六癸酉年二月下旬米子出船、雲州雲津江三月初雲津より出船、隱岐国
嶋後福浦江着致シ四月十六日四ツ時福浦を出船、同十七日八ツ時竹嶋江參着
仕候處唐人大勢居申候付陸江上り壺人吟味仕候處不埒ニ申様ニ付
頭与相見へ申候者壺人下方之者壺人以上兩人召運竹嶋を同十八日八ツ時
出船仕、同廿七日罷戻り候而早束右之段鳥取江御届申候處

49 御東被成御窺右両人之唐人長崎江被遣候、其後戊亥両年渡海仕候得共
唐人大勢居申候付無務ニ而帰帆仕候

第御三箇條之御請

一 竹嶋有之品々委細書付差上候様被為仰出候付古來渡海之船頭水主共へ
相尋見知候物迄品々書留置候付此度左之通書付可差上申候

木竹之類

一 五葉松 一 梅檀 木の色黒赤 一 たいたら
一 きわだ 一 椿 一 とが
一 楓 一 竹 実ハくチなし
一 格 一 まの竹

の白きものニ御座候

50 一 にんしん 一 にんにく 一 ふき
一 こほう 一 あをきは 一 ぐみ
一 いちご 一 いたとり 一 かび

草之類

一 辰砂岩ろくせうのやうの物御座候得共漁迄ニ心掛申ニ付此段者
曉と知不申候
一 彼地ニ大河三筋御座候水主共右川ニ而手水遣ひ申候節山風ニ何と
なく宜香仕候其外ニも珍敷物茂可有御座奉存候共深山ニ而

山の中へ者深く参かたく候由申候

第御四箇條之御請

5 1

一 竹嶋東西広サ之儀、竹木重く相知不申由并嶋廻り者凡拾里余も可有
御座哉与水主共申候、絵図之儀者別紙ニ仕差上申候

第御五箇條之御請

一 竹嶋ミの魚之外獸類有之哉と御尋被為遊候左之通書付差上申候
鳥獸之類
一 ミチ魚 一 ねこ 一 鼬
一 山葦 一 薺 一 あな鳥
一 鳩 一 ひよ鳥 一 かはらひは
一 四十葦 一 かもめ 一 鶲
一 なぢこ 一 つばめ 一 鷺

一 くまたか 其外たか類

第御六箇條之御請

一 唐人相渡候、時節と伯耆国より相渡候時節と違候哉と被為遊
御尋候、古來此方より者一三三月ニ渡海七月上旬帰帆仕候、年々渡海之節
吟味仕見申候處此方より彼嶋小屋之内かこい置候諸道具漁船等少シ茂
取散シ候様子相見へ不申候間唐人共前々渡海仕候儀者無御座と奉存候

但元錄(ママ)五壬申年三月初而渡海仕候様奉存候、然共唐人渡海之

時節者不奉存候

第御七箇條之御請

一 伯耆国より竹嶋迄渡海之数里并竹嶋より朝鮮江渡海之数里

5 3

被為遊御尋候、米子より竹嶋江者百四五拾里竹島より朝鮮江者四拾里程
可有御座之様水主共申候、濱目三ツ柳村より隱岐国嶋後迄三拾五六里御座候
竹嶋より朝鮮山を見渡シ申候處少シ遠く相見へ候故四拾里程と申上候
右之通此度被為遊御尋候付、古來書留置候趣相殘候水主共へ相尋
書付差上申候、以上

大谷九右衛門

享保九丙辰年

伯州米子町人
村川市兵衛

閏四月三日

右之通御座候

一 右竹嶋東西之広サ大概之絵図仕差上候写シ左之通御座候、委細之儀者
別ニ大絵図所持仕罷有候、尤竹嶋之儀磯竹嶋共申候得共古來より

御公辺江差出シ候所之書付二者竹嶋と唱來候、且繪図之通濱田浦着船之所より竹か浦迄壹里余者竹藪二而御座候、ケ様之儀ニ付竹嶋与唱候と奉存候

竹嶋大概之繪図如左

一 竹嶋大廻り拾里余竹嶋より
朝鮮江四十里計り

朝鮮国 北浦 大坂浦 まの嶋 まの嶋
柳浦 竹嶋 古大坂浦 いか嶋 松嶋
北国浦 竹ヶ浦
濱田浦入津所

是ヨリ濱田浦へ四十里計り

松嶋

唐船ヶ崎

隱州嶋後

福浦

隱州燒火山

是ヨリ松嶋へ七十里計り

隱州中嶋

中嶋より福浦へ八里

隱州千振

雲州雲津

雲津より千振へ十八里

隱岐嶋前三嶋

雲州美保ノ関

右之通御座候

一 御尋ニ付右御請書并絵図相添差上候處再応之
御尋之趣如左

一 米子より出雲国雲津浦出船之所迄海路陸路何程有之候哉、但海上迄致往来候哉

一 文禄五壬申年朝鮮人ニ出合候節米子より渡海之船頭水夫其外人数

何程并船何程三而罷越候哉

翌六年癸酉歲罷越候節船數并人數何程三而致乘船候哉一渡海之節前々弓鉄砲致用意罷越候哉

一同七甲戌年同八乙亥年兩年罷越候節

一 朝鮮人ニ出合候翌酉年罷越候節竹嶋江朝鮮人大概何程有之候哉

右之通再応之御尋付御請書差上候趣如左

乍恐口上之覚

一 伯耆国米子より雲州雲津浦迄之道法米子より濱目境村迄
陸四里半出雲国宇井浦江五丁計之船渡り御座候夫より同國
三保ノ関江武里三保ノ関より雲津江者陸路壹里都合七里半五丁

57

一 米子より雲津江船路九里

一 元錄^(マニ)五壬申歳村川市兵衛大谷九右衛門竹嶋江相渡申候船貳百石計
積申候船壹艘遣申候、船頭水主貳拾壹人鳥銃五挺槍三筋遣申候
尤其節居申候唐人三拾人計見及申候

一 元錄^(マニ)六癸酉年之渡海船壹艘船頭水主貳拾壹人鳥銃五挺

一 鐣三筋持參仕候、其節之唐人大勢と計控御座候、前々船貳艘遣候節者鳥銃

拾挺計遣申候、弓ハ遣シ候義無御座候

一 戊亥兩年渡海仕候節船頭水主船數鐵砲數鐵等同前遣申候

一 竹嶋居申候朝鮮人壹年ノ増亥年坏ハ所々五拾人三拾人程宛
大勢罷在候由御座候、以上

58

伯州米子町人

大谷九右衛門

伯州米子町人

村川市兵衛

右之通御座候

一 再応之御尋付右御請書一通差上候、以後重而
御尋之趣如左

一 竹嶋江致渡海候船頭水主存候故而罷在米子江住宅之者候哉
右之通御尋付御請書奉差上候趣如左

乍恐口上之覚

一 米子灘町弥三兵衛^申者七十貳歲^ニ罷成申候、四拾年以前^ニ竹嶋江

一 壱度渡海仕候、此度鳥取江召連參候者御座候

一 米子同町長右衛門^{与申}者五拾三歲^ニ罷成申候、私共鳥取江參候時分八船^{二而}

罷出近比罷戻り申候付様子相尋申候得共元錄^(マニ)四年より同六年迄三年之間

渡海仕候様^ニ申候、私共儀右之者十九歳か廿歳計^{二而}壹度渡海仕候様

59

覚申候故右之通申候上候処、今度直^ニ相尋候得^者唐人渡海之節兩年^者
兩年共参申候由御座候

- 一 米子片原町長兵衛^{与申者}六拾三歳^ニ罷成申候、此者前々四月中旬
船^{ニ而}罷出未罷帰不申候故委細相知不申候
- 一 米子立町源右衛門^{与申者}八拾四歳^ニ罷成申候、三拾七年已前四度渡海
仕候由申候

60

- 一 米子灘町吉兵衛^{与申者}七拾九歳^ニ罷成申候、四拾三年已前拾度渡海
仕候様申候、右兩人ハ極老歩行不叶候故右鳥取江召連不申候

右之通御座候

- 一 米子片原町太兵衛^{与申者}七拾五歳^ニ罷成申候四拾四年已前兩度渡海仕候
由申候
- 一 米子立町惣兵衛^{与申者}七拾五歳^ニ罷成申候、四拾六年已前^ニ兩度渡海仕候
由申候、右兩人之儀^者私共急^ニ鳥取江罷越候^ニ付相知不申候処、今度
御尋之上^{ニ而}申出候間書付差上申候、以上

伯耆国米子町人 村川市兵衛

大谷九右衛門

享保九年辰六月廿三日

61

右之通御座候

- 一 右享保九年辰四月竹嶋渡海之次第從江戸御尋之節尚又從鳥取
御尋之條々則以御書付被為仰出候趣如左

申渡之目録出来之節

別紙^ニ認之品左之通

- 一 徒三拾三年三拾壹年跡迄遣候船頭壱人^{茂存}候故不仕候ハ^者其通を
書印候事

- 一 今度召連候壱人^{茂三}拾三年より已前之水主^ニ有之候者其段も書印候事
- 一 唐人竹嶋^江參居候節家宅^者拘不申両人方之船方共之小屋掛
残シ置夫^ニ居申候旨其通書印候事

62

- 一件之節已前唐人竹嶋^{ニ而}見不申候ハ^者其通書印候事
- 元祖之名只今之市兵衛迄何代
- 九右衛門同事
- 竹嶋御免被遊渡海初り年号等
- 右之儀御執持被遣候御旗本衆御名并御執る持被下候由

新太郎様江御老中より御奉書之写シ

御紋之風見御免被遊候品

兩人先祖江戸江御目見江罷下り候初年号

享保九甲辰年四月

右之通御尋付御請書一通差上候處尚以祖父村川市兵衛儀

出府被仰附候趣如左

覚

村川市兵衛儀御用之事候間早々当地江可罷越候
市兵衛当地江龍越刻新太郎様御代御老中御奉書可致持參候
大殿様御代荒尾内匠江従宗對馬殿之御状可致持參候
其外古来より竹嶋渡海付覚書可有之候間不残持參可申候
市兵衛不おほへニ有之者存知候者召連可罷越候

六月日

右之通御座候、就夫祖父村川市兵衛儀乍恐出府仕御尋之次第委細
御請申上候条、尤右持參仕候所之從

64

對馬守様内匠様江被為預御挨拶候御書之写シ如左

尚以庄五郎殿御在江

戸之由承候故江戸此等

之通直三申達候、朝鮮三而八

馳走之様子者彼弥三右衛門

定而可申入候

一書令啓候、就者

庄五郎殿御領分

伯州之内米子

村川市兵衛代官

弥三右衛門竹嶋渡

海仕用所相仕廻

六月之末帰国之

刻被放風朝鮮國

之内府山之浦漂

流仕候処、日本人

故於朝鮮表別而

念を入此方へ被相

65

送候条彼弥三右衛門

与七郎_二我等_ハ相

添送遣候、委曲

沼川次兵衛可申入候
間不能一二候、恐々

6 6

謹言

宗對馬守

書印

八月廿六日

荒尾内匠殿

御宿所

右之通御座候

一 右祖父村川市兵衛儀江戸江始而罷下候節元(ママ)錄 武巳六月於
御国屋敷從志摩様御公辺之儀万々蒙御差団候趣、尤
但馬様より米子御役所江被仰達候御書之写シ并右祖父

6 7

村川市兵衛儀江府より罷帰候節右為御礼擎愚札候之処、
之為御返翰從但馬様御書被成下候類、尤從外様或者

年始御祝書差上候節右御披露之為御返翰御書被成候処
相遣之写シ如左

一筆申入候、然者村川

市兵衛惣先頃江戸へ参

着申候得共相煩申由二而

去ル六日荒志摩長屋江

参万々御差団次第二

可仕申付御聞役衆

被申談江戸二而之首尾

具二被申喰候

殿様江去ル七日首尾能

御目見仕候村川市兵衛惣与

在之候而ハケ様之者共父子

6 8

公方様江御目見難調旨

此度

公方様江之御目見若調不
申儀も可有之_与御聞役共
申、就夫何_茂被致相談親

69

市兵衛義者年罷寄最早

江戸江罷越儀難成_ニ付、此度
惪罷越候、則名をも市兵衛と

申候_与申込候_者

御目見調安可有之_与志摩
被存名改親之名_ニ被改候由

志摩より我等方江右之趣

被申越候、此旨可被得其意候

親市兵衛儀早々名を

いケ様共替申様可申渡候

70

一 最早此已後者親市兵衛

江戸江不罷越惪市兵衛迄

參候様親市兵衛江可申渡候

一 村川儀江戸仕廻候ハ_者直其元へ

帰候様_ニと当春各へ申渡候得共

江戸より直々当地江罷越首尾

能候而直々当地江參候様_ニと

江戸江之便_ニ村川方江

家來方より申遣候、恐々

謹言

71

但馬

書印

六月廿一日

柴山甚内殿

鷺見佐左衛門殿

白井七左衛門所迄飛札

殊以串海鼠一折到

來心入之段欣然候

公方様江首尾能

御目見相済候由一段之

仕合候猶七左衛門
可述候也

但馬

書印

九月十二日

村川市兵衛とのへ

飛脚殊雉子番

到来紙面之趣令

委聞候、入念段満足

申候、此度願首尾能
相調一段之事ニ候得者

荒修理

書印

十二月月十五日

村川市兵衛殿へ

修理年賀為祝詞

其地従町中飛脚

殊看一種到来

令満足候、遠路

被入念段一入、猶

白井七左衛門より可述候

謹言

玄蕃

書印

正月晦日

村川市兵衛殿

大谷藤兵衛殿

7
4

7
3

7
2

宮本三郎右衛門殿

為年甫之嘉儀

75

家頼所迄來札殊
一種到来、欣然之至候
弥無異加年之旨

一段之事ニ候、謹言

上総

書印

正月十三日

村川市兵衛殿

右之通御座候、今以年始御祝書差上候ニ付
平右衛門様より當時天明三卯二月右御披露之

76

為御返翰私江御書被成下候写シ如左

為年甫之嘉儀

家來方迄來札

欣然ニ候、弥無異

加年一段事ニ候謹言

平右衛門

書印

二月朔日

村川市兵衛殿

77

書狀令披見候、如來意
新正之慶賀申籠候、愈
御無異加年旨珍重存候
超歲候、為年甫之嘉儀
紙面之趣遂披露候処
被人念候儀則被及書中候
恐惶謹言

林新兵衛

二月朔日

書印

砂川源五右衛門

書印

78

右之通御座候

一 御入国已来尤私共祖父之者迄例歳竹嶋渡海仕候節鳥府
御用之趣以御注文被仰付候所之御書付并御用之品々
被召上候節御小目錄被成御渡シ被成候、ケ様之類茂余夥所持
仕候處及紛失申候、尤相殘候御書付写シ如左

覚

一 上々串鮑	五千貝
一 上串鮑	三千貝
一 中串鮑	弐千五百貝
一 上々丸干	三千六百貝

79

一 上丸干	三千貝
一 腸漬鮑	弐百貝
一 鮑腸塩辛	壹斗五升
一 木耳	弐斗

右之品々

殿様御用也

牧野清左衛門

正月十一日

村川市兵衛殿

(貼紙)

「正徳五乙未年より安政元酉年迄

永

六十二年ニ成

安政六酉年より文久元酉年迄

八十五年ニ成

合百四十七年」

竹嶋串鮑目録

上々串鮑	拾五連
上串鮑	拾五連
上丸干鮑	三百貝
中串鮑	七十連
腸漬鮑	壹斗
腸塩辛	五升
木くらけ	

右者

大殿様御用候、以上

正月廿九日
村川市兵衛殿

牧野清左衛門

中々串鮑	三拾連
中丸干	五百貝
下丸干	武百貝
腸漬鮑	百貝
腸塩辛	
右之通	八升

壱州様御用候

正月廿五日
村川市兵衛殿

牧野清左衛門

一 上々串鮑貳拾三連	内	五連市兵衛江戸土産 <small>二</small> 被遣
一 上々串鮑百連	内	拾八連 <small>ハ</small> 此方 <small>江</small> 被召上候
一 中ノ串鮑百拾連	内	武十五連 <small>ハ</small> 市兵衛 <small>ハ</small> 被遣候
一 下ノ串鮑百拾連	内	七十五連 <small>ハ</small> 此方 <small>江</small> 被召上候
		三十連 <small>ハ</small> 市兵衛 <small>ハ</small> 被遣候
		八十連 <small>ハ</small> 此方 <small>江</small> 被召上候
		拾貳連 <small>ハ</small> 市兵衛 <small>江</small> 被遣候
		九十八連 <small>ハ</small> 此方 <small>江</small> 被召上候

一 下々同百三拾八連者不残市兵衛江被遣候

右串鮑都合四百八拾壱連

内 上々上中下合式百七拾壱連ハ此方江被召上候
上々上中下合式百拾連ハ市兵衛江被遣候

一 桐ノ木拾本之内 太キ宜木三本被召上候

殘る七本ハ市兵衛へ被遣候

一 油木海月 此方御用無御座候

一 上々串鮑 直段壱連付 丁銀七匁宛

一 上同 直段壱連付 同五匁九分宛

一 中同 直段壱連付 同四匁式分宛

一 下同 直段壱連付 同三匁壱分宛

右之直段二被召上候間左様可被仰渡候

一 桐ノ木 直段付無御座候拾本之内太キ能木

三本直段可被仰下候、以上

山住源右衛門印形

寛文四年六月十八日

宮田吉左衛門印形

大脇太左衛門殿

坂川文左衛門殿

金万八右衛門殿

右之通御座候

右竹嶋渡海御禁制之旨元錄(マニ)九年子ノ八月於鳥府被仰渡

翌元錄(マニ)十年丑八月祖父村川市兵衛儀江戸江龍下り竹嶋渡海

御制禁之趣御請申上候二付、則御公儀江差出候所之書付并
御国屋敷江御歎之願書差出候、右両度之控相残之写如左

乍恐口上之覺

一 去年子歳八月上旬從

松平伯耆守殿被仰渡候、此度以

御奉書竹嶋渡海之儀向後御制禁被仰付候条

其通相守可申之旨御座候、其段奉畏候、以上

伯耆米子町人

右之直段二被召上候間左様可被仰渡候

一 桐ノ木 直段付無御座候拾本之内太キ能木

三本直段可被仰下候、以上

山住源右衛門印形

元録(ママ)元年丑九月日

86

乍恐口上之覺

一 私儀先祖より竹嶋渡海之所務を以渡世仕候處、去秋竹嶋渡海之儀制禁被為仰付當時渡世之經營難相成迷惑至極奉存候
大屋九右衛門世伴者幼少ニ罷在候故私儀此度御当地江罷越申候、何卒殿様御威光を以渡世之願茂仕、前々之通御目見奉願度奉存候恐多奉存候得共以御慈悲右之願御取上ヶ被為下候ハ者難有可奉存候、依而右之段奉願候、以上

元録(ママ)十年丑九月廿一日

村川市兵衛

吉田平馬様
小谷伊兵衛様

87

右之通御座候、尤右享保九年閏四月鳥府御尋之條々御請書
壹通差上候写シ如左

乍恐口上之覺

一 三拾三年より三拾壹年跡迄竹嶋渡海之船頭水主存命ニ而居不申候雲州并隱岐國より過半召抱申候、右之所之者存命ニ而罷在候哉、此段不奉存候

一 三拾三年已前竹嶋渡海仕、只今相殘居申候者五人御座候内式人者廻船ニ而罷出宿ニ居不申候、残り三人之内式人者八十余ニ罷成申候、此度召連申候七十式歲ニ罷成申候

一 此度召連候弥三兵衛と申水主ハ三拾三年より已前渡海仕候者御座候

88

一 唐人竹嶋江参居申候節自分小屋拵申哉と被成御尋候、自分拵申候様子二者相見江不申候、毎年此方より拵候小屋ニ居申候由水主共申候
一 三拾三年已前竹嶋ニ而唐人見申候哉与被為遊御尋候、元和年中以後唐人見不申候由其節申上候
一 私共先祖何代渡海仕候哉と被遊御尋候村川市兵衛三代已前より渡海仕名茂三代共市兵衛与申候
一 大谷九右衛門儀唯今迄四代竹嶋渡海御免之節者甚吉与申候後
一 竹嶋渡海被為遊御免候年号御目見仕候年号并其節

御執持被遣候御旗本衆御名前之儀并御執持被下候、御由緒之儀

89

被為遊御尋候、元来村川市兵衛義先祖之儀者

權現様御代天正九年四月於摂州表聊御奉公筋之儀共御座候、其後中國江罷下り伯州之内住居仕候処、新太郎様因幡伯耆被為遊御領知候節元和年中御仕置之為上使阿倍四郎五郎様御越之刻、私共先祖之者共隱州之海上竹嶋与申孤嶋江渡海仕段御訴詔申上、翌年江戸表へ罷下り候所、右御由緒之儀共御詮儀之上新太郎様江以御奉書竹嶋渡海之儀被為仰附、自夫両人隔年江渡海仕候、尤八九年之内壱人宛罷越

公方様江御目見申上候、尤初而御目見申上候、年号月日相知不申候
一 御紋之風見之儀代々蒙御免候、是又御免之品合相知不申候

90

一 元錄(ママ)十年丑八月村川市兵衛儀江戸江罷越

殿様御威光を以竹嶋渡海之儀相歎候得共嶋之儀者相調不申由付、大勢之水主共勝手必至与取続不申、其上病氣付、同十六未年三月於御国屋敷御暇願在所江罷帰候、以上

村川市兵衛

享保九甲辰年閏四月三日

大谷九右衛門

右之通御座候

一 右二書頤候通私祖父之儀者

御公儀江御訴詔之節尤祖父大谷九右衛門儀參府仕候条自分日記

之写シ左之通御座候、尤御公儀之御請披而已抜書仕候写ニ而御座候

91

委者是又別二書付共所持仕罷有候

御公儀江御訴詔之御請自分日記之写シ如左

一 御公儀江差出シ候所之願書毫通添書式通并由緒書一冊元文五年申四月

従四月八日

太守様御公儀江御達之儀河村彦十郎様被成御執計、則私儀寺社御奉行所牧野越中守様江御差出被成候事

一 越中守様御内寺社方御下役田中小右衛門様荒木伊左衛門様御三人之内小右衛門様御手付申候、乍恐私共奉差上候御願書御取上ケ御見分被成候上ニ而段々御尋之趣二御座候、隨而御請委細二申上候得者御尋之儀相済申候御事

92

一 田中小右衛門様被仰聞候趣右之願書、則越中守様御前江差上可申候
御見分被為成候上三而追而可被召出候間得其意罷歸申候様ニと被仰候而
奉畏罷帰候事

一 御国屋敷江參上仕右之趣委細ニ御役人様方江御注進奉申上候事
一 申四月十七日牧野越中守様より御差紙を以明十八日四ツ時ニ
御屋鋪江私儀罷出可申与被仰付候、右御請書差上、隨而十八日

四ツ時參上仕相窺罷在候得者、御奉行様方例月之通御寄合
被為成諸願之御吟味相始り私儀被為召出相窺居申御奉行様
方御座席之次第

一 牧野越中守様

9 3
一 本多紀伊守様

一 大岡越前守様

一 山名因幡守様

右之通御連座被為成御次之間御家々之御下役衆中様方

御連座被成候、其次之間ニ而私共奉差上候御願書御役人様方

御持出シ被成候而御奉行様方御前ニ而御読上被成候而相終り申候

其上ニ而越中守様被為成御意候趣九右衛門竹嶋之支配を誰か

致候哉与御尋被為成候、隨而御請申上候、竹嶋支配之儀者先祖之者共

相蒙私共迄茂支配仕来り候由申上候、則御奉行様方御一同ニ

夫者重キ事哉与御意被為成候、次ニ御尋之趣竹嶋松嶋両嶋

9 4

渡海禁制被為仰出候、以後者御領主より御憐愍を以渡世仕罷有候
願書ニ書頤候段然者扶持抔請申候哉と御意被為成候、隨而申上候御夫持

ニ而者無御座御憐愍を以と書上候儀者米子御城下江諸方より

持參候魚鳥問屋口錢之儀、則私家錄ニ被為仰附候、并同役村川

市兵衛儀茂御城下江入込候塙問屋口錢之儀被為仰附候兩人共

右之品忝御恩賜置奉存候旨申上候、其上ニ而大岡越前守様

御意被為成候趣九右衛門此添書ニ書頤候通大坂御廻米船滞り之儀
並貫物連中ニ加り申度儀弥御願申上候哉与之御尋ニ而御座候、隨而
御請申上候趣天道ニ相叶御憐愍之筋相下り申候者右之式品乍恐
御願申上度旨申上候、然者又越前守様より被為成御意候之趣

9 5

九右衛門此両品之儀与長崎表之儀者長崎御奉行所之作廻并御廻米之義ハ
御勘方掛りニ有之候得者此方之作舞ニ而無之候故此義者御勘定方へ

相願申候而可然筋^ニ候、此方之了簡^ニ不及^与被為仰出候得者

越中守様紀伊守様御一同御意被為遊候趣、イヤ／＼左様^ニ者無御座候

九右衛門御願筋、則御上江御伺申上候而其上御差団次第^ニ而御勘定方

長崎御奉行所^{江茂}差出シ可申^与御詰開被為遊候御事^ニ御座候、又

越中守様被為遊御意候趣、九右衛門竹嶋^者大嶋と絵団^ニ而相見候嶋山之

風景竹木草類禽獸之類日本之模様^{与者}品少々^者相替り申候哉と

御尋^ニ而御座候、隨^而申上候、私先祖甚吉儀^者自分渡海仕候而其身竹嶋^ニ而

病死仕候、其已後^者嶋主共両人共自分渡海不仕候故私儀眼前之儀者

9 6

不奉存候、旧記^ニ書頤差上申候通御座候ハ、御請申上候其上^ニ而 越中守様

紀伊守様因幡守様より海馬之魚と申^者如何様之形恰好成もの^ニ候哉

与御尋被為成候、隨^而申上候みちの魚と申ハ頭鹿のことく両鰭長く

尤鰭先キ^ニ爪有之能陸^ニも上り候、尾頭^者矢籠^ニ而 一体^ニも生ひ

毛色鹿の毛のことく^ニ而御座候大海馬^与申候得者馬程も御座候

条並嶋猫之儀皆黒色尾頭切居申候由御請申上候、此外辰砂

岩綠青馬脳杯之儀御尋被為成候隨^而御請申上候、然者

越前守様被為成御意候^者九右衛門兔角此御廻米並貢物之儀^者

其持口之役所^江願申可然候此方共之作廻^ニハ何んらざる事^ニ候

と御申被為成候得^者 越中守様紀伊守様より被為成御意候ハ

9 7

イヤ／＼兔角御上江御窺申、其上御差団次第^ニ而御勘定所^江九右衛門儀

差出シ可申^与被為成御意候得^者御吟味之趣相済申候、田中小右衛門様被

仰候^者最早九右衛門すたり候へと之儀御座候而奉畏罷立候御事

一 御国屋敷^江參上仕今日於御役所奉差上候御願書委細之御吟味

相済、隨^而乍恐御請申上候儀御役人様方^江具^ニ御注進申上候御事

一 申四月廿四日牧野越中守様^江乍恐為御窺參上仕候、其節田中小右衛門様

荒木伊左衛門様次藤文左衛門様御出合被成被仰聞候御口上之趣ハ其方

御願之儀去ル十九日寺社御奉行所御仲間合様方御登城之節

則御老中様^江御差上御披見^ニ及申候間追^而御沙汰之趣相下

可申候^与之御事^ニ御座候而其旨奉畏難有奉存上候段申上

9 8

罷帰申候御事

一 申五月三日越中守様^江乍恐為御窺參上仕候得共、田中小右衛門様

御出合被致候御口上之趣其御願之義未何之御沙汰相下り不申候

然者其方より被差出候由緒書^ニ被書頤候所^者御老中様方より

為御礼其方旅宿^江御口上書并參勤之御礼被申候節於

御城御書出シ之御書附等何角取渝御奉行所様江差上可被申候与
被仰附候、隨而申上候、乍恐御願申上度奉存罷在候、爰ニ御役所様より
御差図を以右之御書附奉差上可及御見分之段難有奉存候与御請
申上罷帰候御事

一 申五月六日右被為仰附候御古書差上候目錄左之通

99

一 朝鮮國より竹嶋渡海之船頭水主江被遣候御餞別之目錄式通
松平右衛門大夫様より私先祖之者出府仕候節旅宿江被下置候御使札壹通
秋元摶津守様より先祖之者出府仕候節旅宿江為御礼御口上書被
下置候壹通

一 加藤佐渡守様より私出府之節為御礼旅宿江被下置候御口上書壹通
一 酒井讚岐守様より阿倍四郎五郎様江先祖之者出府仕候節被為進候
御手紙壹通

一 大久保宮内少輔様より私先祖之者江被遣候御状壹通

一 阿倍四郎五郎様より私先祖之者江被遣候御状壹通

一 長谷川正悅様より私先祖之者江出府仕候節為御礼御手紙一通

100

一 公方様江御目見被為仰附候節參勤独礼之次第御書出シ壹通

一 松平新太郎様江御宛之御奉書之写シ壹通

一 松平伯耆守様江之御奉書之写シ壹通

以上十四通奉差上候

一 其以後者五月七日ニ御役所様江乍恐為伺參上仕候、然共重キ
御事御座候得者其年茂及暮ニ申候御事

一 明ル酉ノ二月十一日牧野越中守様より御差紙を以明十二日四ツ時
御役所江罷出可申与被為仰附御請書差上、隨而十二日四ツ時
御役所江參上仕相窺罷在候得者田中小右衛門様御出合被成
尤去申五月六日越中守様江差上申候御古書拾四通御指出シ

101

一 被成御改以上拾四通、則私江御返シ被成候、其上ニ被仰候、右書去ル
五月六日差上被申候、以後今日迄則

殿様御居間御床之上ニ被為置候、尤御仲間様方御寄合被為成候
節御取出シ被為成候而御見分ニ及候而是者由緒正敷事与被為成
御意候、右之筋ニ付此度御歎申上候儀尤不便成事と被為思召候而
則書上申候式通之内壹品ニ而茂坪明遣シ申度物と被為成御意候
旨、則小右衛門様被仰聞候、隨而難有仕合奉存候趣御請申上候御事
一小右衛門様被仰候者右古書御説被為成候ニ付御役所之御帳面

繩ヲ被為仰付相改見申所ニ其方共先祖より御上江御目見之
次第委細ニ有之候由被為仰聞候御事

102

然者其方共御願書添状ニ書付被差上候条大坂御廻米船借之儀
於御城御勘定方御奉行様方江寺社御仲間様より委細被仰達
置候、則当月水野對馬守様御當番ニ而得者右御寺社御役所江
被差上候通御願書添書由緒書等相認候而對馬守様御屋敷
江罷出御取次之役人衆迄其方可申上口上之覚

牧野越中守様より於御城先達對馬守様江御達被為置候

願人伯州米子之町人大谷九右衛門儀御願書由緒書以上四通

乍恐差上申候寺社御奉行様より被為成御差出シ候故乍恐參上仕候
御憐愍を以願書之趣御沙汰宜敷相下り申候様偏ニ奉願上候
迄可申上候、斯之通被仰付候、其旨相蒙難有奉存候、然者吉日ヲ

103

撰二月十六日對馬守様御屋敷小川町通江參上仕候而右御下知
之通御取次衆中様迄申上候、則御願書由緒書以上四通差上置候
御請取被成候而對馬守様御前江被差上之暫時有之御取次
衆中様御出被仰聞候御口上之趣願書御取上被為成候、追而可被
為召出与之御意候間其旨相心得可被申与被仰出候故奉畏候与
御請申上罷帰候事

牧野越中守様江參上仕右之趣田中小右衛門様江申上候御事

一 御國屋敷江參上仕御役人様方江右之趣御注進申上置候御事

一 同二月十七日之夕水野對馬守様より御差紙を以明十八日四ツ時
神田橋通神尾若狭守様御屋敷江罷出可申与被為仰附候

104

御請書差上申候而隨而十八日四ツ時御屋敷江參上仕相同

罷在候得共御取次衆中様より九右衛門罷出候得与被仰候故乍恐
罷出申候御座席之次第

一一一 神尾若狭守様
一一一 水野對馬守様
一一一 神谷志摩守様
一一一 河野豊前守様
一一一 木下伊賀守様

右之通御連座被為成御次之間ニ而私共奉差上候御願書
御役人様方御持參被成候而御讀上相濟申候上ニ而若狭守様

105

より被為成御意候之趣九右衛門国本二而者何を務ル事ニ候哉与御尋

御座候、隨而申上候同役村川市兵衛私儀御城下米子町年寄

御役儀代々相蒙相勤罷在候与申上候得者、其上二而被為成御意候

家業者如何様成壳買致候哉与御尋御座候、隨而申上候私共儀

諸商売不仕候右御願書之書頭候通元禄九年竹嶋渡海

制禁被為仰出候已後者因伯之御太守様御内伯州米子之

御城主より御憐愍を以渡世仕居申候段申上候得者然者御扶持ヲ得

申候哉と之御尋ニ而御座候、隨而申上候右様二而者無御座、候米子

御城下被持來り候魚鳥之間屋見せ之座ヲ私家督与被為

仰附候、則問屋口錢取仕候并同役市兵衛儀ハ御城下江入込候

106

塩問屋口錢取被仰附置候此口錢を以渡世仕居申候是以乍恐

公方様御大恩之御余光与奉存難有仕合奉存候旨申上候

其上二而對馬守様被為成御意之趣

公方様江江御奉公之筋者如何有之候哉与之御尋御座候、隨而

申上候様御請申上候段恐入奉存候、乍去元禄八年朝鮮國王より竹嶋

与申者從古來日本之御支配ニ而御座候との御證文を

常憲院様御代被為遊御請取候、然者竹嶋日本之御支配与

奉存候儀者乍恐元和年中村川市兵衛大谷九右衛門先祖之者共

安倍四郎五郎様御執持を以御注進仕候ニ付達

107

尤右竹嶋より御公儀江極たる御藏入者無御座候得共、唐木之類

御用木を茂年々公納相勤元和已来八拾年之間九年ニ壹度

參上之御礼申上難有仕合奉存候、右之通御座候得者竹嶋と申者

日本之御支配成との聞を御公儀江江御取被為遊候義与奉存候

此段毫末之御奉公ニ茂相當可申哉誠以恐入奉存候得共

御請申上候由申候其上ニ而對馬守様被為遊御意竹嶋竹木

草類禽獸海馬之魚鮑杯之儀御尋御座候故隨而申上候

此趣之儀者委細旧記ニ書頭シ差上申候通ニ而御座候由申上候

得者先御吟味之儀是迄ニ而相濟申候

一 對馬守様被為成御意候趣追而御評儀被為成候而可被為

召出旨被為仰附候而奉畏即御役所罷歸候御事

一 牧野越中守様江江參上仕今日御勘定御奉行様江江被為召出候得而

差上申候御願書御見分被為成候上ニ而段々御尋之趣御座候、隨而委細

108

御請申上候得者先者御吟味相済申候、右乍恐御注進奉申上候旨申上候得者、即田中小右衛門様御承知被成候御事

御国屋敷江参上仕右之趣御役人様方江委細御注進申上候御事

西四月十七日水野對馬守様より差紙を以明十八日四ツ時御屋敷江罷出候様被仰附候御請書差上、隨而十八日四ツ時参上仕相伺罷有候得者被為召出御奉行様方御連座被為成候、則對馬守様

被為成御意候者九右衛門差上申候願書御廻米船借儀是者

109

於大坂とま屋久兵衛越前屋作右衛門申者年切ニ而作廻仕申候御儀定之年相達不申内者御役所より之返事之儀難申附也、然上者右之兩人之船借り共へ其方より相対致候而船借り役人江相加り可申哉、右之通候上者役所より返過之儀難申付候与評儀一決申也、其旨相心得可申与被為仰附候、隨而御請申上候趣先以及御沙汰申上段難有奉存候、此上追而御慈悲相下り申候義乍恐御願申上度与申上すさり申候御事

110

一 牧野越中守様江参上仕右之趣田中小右衛門様江申上候得者御承知被成候而小右衛門様御申被成候者先刻御勘定所御奉行所より寺社御奉行御仲間様江御使者相立候御口上之趣大谷

九右衛門差上候願書見分申上候評儀申候處船借之儀於大坂年切作廻仕候者

兩人有之候未年限及不申候故役所より返過之儀難申付候得者

此段九右衛門江申渡候、尤右之船借り兩人江相対致候而加り可申哉与

申聞候て右之九右衛門御差出シ之儀御座候故如此以使者申達候との御口上書來り申候、則其方罷出御注進被申上候儀御前江可

申上候与被仰候御事

一小右衛門様御申被成候者御役所御仲間様より御老中様江其方共御願書御差上及見分去年已來壹年半ニ打過、則御下知相下り此節御勘定所江其方御差図被成候處右之御返答之趣ニ而者

御上江相達シ御下知相下り申候處相済不申候然者寺社御仲間様方

111

御寄合之刻此儀御評儀被為成候而又押返其方可被遣候哉与拙者共ハ存入候、追而其方儀可被為召出候之間左様相心得可被申候与被仰候御事

一 西六月二日牧野越中守様より御指紙を以明三日四ツ時御屋敷江罷出可申与被仰附候御請書差上、隨而二日四ツ時参上仕相同罷在候得者田中小右衛門様御出合被成候而被仰候者先頃其方へ申入候

通先月十八日寺社御仲間様方御寄合之節御勘定所へ又々

其方御差出シ可被遣_与之及御評儀御沙汰申候処、寺社御奉行様より御勘定所之御指図被為成候_ニ相当り可申哉_与以後之入割

之程御氣付被為成候故重_而其方御差出シ被為成候儀者

112

御優予被為成候、然上_者長崎御奉行所江御差出見度_与御評義一決被為成候_ニ付先日御登城之節於御城寺社御仲間様方より長崎御奉行所萩原伯耆守様江御面談_ニ其方儀御差出シ

被為成候御達被為御願書相認次第参上仕可被申候者被仰付候

尤其節可被申上口上之儀牧野越中守様より於御城先達_而

御達シ被為成候伯州米子町人大谷九右衛門御願書乍恐奉差上候

与可申上旨被仰附候其節長崎御奉行様當時御出府萩原

伯耆守様御屋敷水戸橋長崎御勤番窪田肥前守様御屋鋪

表六町町_与則田中小右衛門様より御書附被遣、隨_而申上候御下知

之趣承知仕奉畏候、御願書相認其上吉日を撰

113

伯耆守様御屋敷江参上可申上候先以難有仕合奉存候乍恐

御序之刻殿様御前宜御執成奉願上候旨申上罷帰り申候

御事

御国屋鋪江参上仕右之段御役人様方へ委細御注進申上候御事

西六月十日長崎御奉行所萩原伯耆守様御屋敷江御願書

捧參上仕候_而、則御取次衆中様_ニ右田中小右衛門様より被仰付候通之口上

申上乍恐御願書差上申候御請取被成御下役中西幸内様御

申之儀追付殿様御屋敷江御出可被成候、其旨相心得可被申

与被仰聞其上_ニ御屋敷江被為召出相窺罷有候、伯耆守様

被為遊御意候趣其方儀国元_ニ者如何様成壳買申候哉

114

御尋_ニ而御座候、隨_而御請申上候、私共義元_(マ)錄年中竹嶋松嶋両嶋

之渡海制禁被為仰出以後者御願書_ニ書願差上申候通伯州米子

御城主より御憐愍を以渡世仕難有奉存候旨申上候、然_者扶持を得候欵と被為成御意候、隨_而申上候左様_ニ者無御座候、御憐愍と申

上候儀者米子御城下江諸方より入込申候魚鳥之間屋店之座

私家督_与被為下置候、同役市兵衛儀者御城下へ入込候塙

問屋口錢之儀被為仰付候而渡世仕罷在候是全

公方様御大恩之御余光_与奉存上兩人共難有仕合奉存候段乍恐

申上候得者其上又被為成御意候趣其方共在所^{二而}ハ奉行所へ
勤杯申候哉と之御尋御座候、隨^而申上候兩人共代々米子

115

町年寄御役相勉申候儀^ニ御座候由御請申上候、又竹嶋竹木草類
禽獸海馬之魚鮑杯段々と御尋御座候、隨^而御請申上候御事
一
伯耆守様被為遊御意候者九右衛門御上^江差上申候願書及見分
候長崎表貢物入札連中^江相加り申度との儀此事ハ古來より江戸
京大坂堺駿河長崎皆御領^ニ者入札連中^江相加り申者之儀
有之也惣御領之外より貢物入札人数^ニ入候事未其例無之也
我等壱人之了簡^ニ不及、尤同役^ニ可申談也、急^ニ者請込不成故
先者左様^ニ相心得可申^与被為仰附候、寺社御奉行様^{江茂}
此段以使者可申達候^与可被為御意候、隨^而申上候乍恐追^而何卒
御慈悲相下り申候段幾重^ニ茂奉願上候旨申上候^而すさり

116

申上候、中西幸内様被仰候唯今御前^ニ被為成御意候通御領
之外より貢物人數江相加り候、其例未無之候得者御壱人様之
御了簡難被為成御事御尤存候、然上^者追々品も可有之候
左様御心得可被申^与之御事^ニ御座候、御請申上罷帰り申候御事
一
牧野越中守様^江參上仕田中小右衛門様へ右之趣委細申上候得者
御承知被成此趣殿様^江可申上^与御申被成候御事

一
田中小右衛門様被仰聞候御口上之趣其方共御願之儀^者
御老中様被為及御沙汰御差図を以御勘定所并長崎
御奉行所^江寺社御仲間様方於御城、則御面談^ニ被為
仰達候^而其上其方御差出被為遣候處、則御両御役所より

117

右之御断^ニ候^而者相濟不申事候、追^而御仲間様方御寄合之節此儀
御評義可被為成候、其上^ニ可被為召出候間左様相心得可有之^与之
御事^ニ御座候、隨^而申上候私共体儀^ニ御苦勞奉掛申上候段
千万恐入申上候、然共御慈悲者御上より相下り申儀御座候得者
乍恐幾重^ニ茂御慈悲之段奉願上候^与申上罷帰申候御事
一
御国屋敷^江參上仕御役人様方^江右之趣委細御注進申上候御事
酉ノ八月十七日牧野越中守様より御差紙を以明十八日四ツ時
御屋敷^江可被出候被為仰附、則御請書差上隨^而十八日四ツ時
參上仕相窺罷在候得者田中小右衛門様御出合被成
越中守様御口上之趣此度其方共断之儀尤此度

118

由緒正敷有之付而、則御上江江被為成御達御老中様及
御沙汰御差団ヲ以御勘定所并長崎御奉行所ニ其方

御差出シ被為成候所右御兩御役所より右之御断之儀以御使者
被為仰達候、尤其方江茂右之通被為仰渡候条依之寺社御仲間様
方此儀及御沙汰又々押返シ其方儀右之御兩御役所江御差出シ
可被為成儀ニ候得共其方ノ之御奉行所与申者重キ御事候得者
入割如何哉与又御用捨之儀も有之候、然上其方共儀不便被為
思召候、依之江戸京都大坂其外於御領當時御公儀江之御為次ニ
其身之潤共可成与存付之儀茂有之候者早々書附ヲ以
罷出御願可申上候御吟味之上ニ而宜可被為仰附候間其旨

119

相心得可申与被仰附候、隨而御請申上候、重々以御慈悲之御下知
相蒙申上候段千万恐入難有仕合奉存候、乍恐御前宜御執成
奉賴上候、然上者御国屋敷江茂此旨相達可申与色代仕罷有候
御事

一

御国屋敷江参上仕御役人様方江右之趣委細ニ御注進可申置候御事
右者元文寛保之際御公儀江御訴詔之御請并竹嶋渡海
之次第先規より書附之写シ荒増如茲御座候尤竹嶋渡海制禁
之後享保九甲辰四月御公儀御尋之儀ニ付委細御請書仕
鳥府表江差上之候、依之右祖父大谷九右衛門事元文五年
四月参府仕御訴詔之趣自分日記迄相写シ置候、尤右延享

120

元年より当時天明四年迄四拾年ニ相成申候、以上

伯耆国米子町人

村川市兵衛

大谷政太郎

天明四年甲辰

二月日

121
122

(白紙)
(白紙)